

強者の戦略

modern という語を英和辞典で調べてみると、真っ先に目に入るのは「現代」と「近代」の2つでしょう。そして、この訳し分けをどうするかという問題に、池吉少年は随分長い間悩まされてきました。

「文脈からふさわしい訳語を選べば良いんじゃないですか？」

確かに“今の”私ならある程度自信をもって選ぶことができるでしょう。でも、そのためには莫大な背景知識と経験が必要になります。それを大学受験生に求めるのが適切とは思えません。

「いや、そんな莫大な背景知識なんて必要なくて、日本史や世界史の時代区分に照らし合わせれば難なく識別できるのでは？」

確かに、歴史の大まかな区分として「古代 中世 近世 近代 現代」という時代区分が用いられています。ですが、近代と現代の明確な境界線が確定しているのかと問われると、どうも雲行きが怪しいです。すぐに確認できるソースとして Wikipedia を取り上げてみると、「現代」の項目には「アジア史」「ヨーロッパ史」「文化史」等々に細分化された現代の定義が紹介されています。仮に Wikipedia の記述が歴史学における定説であるとしても（恐らくはもっと複雑で錯綜とした論争があるのですが...）それらを網羅的に学習していなければ「近代」と「現代」の訳し分けができない、というのはあまりに負荷が大きすぎます。また、大学入試英語の観点から見ても、英語の試験なのに高校レベルを超えた歴史学の知識が要求されるというのは、何かおかしいと思います。

それでは、一体どうやって modern の意味を定義すれば良いのか...強者を志す貴方は、こういった問題に何度も出くわしてきたことと思います。特に最難関レベルの大学入試問題になると、大学レベルの背景知識が要求されるものも少なくありません。ですが、ここで注意しなければならないのは、貴方が挑もうとしているのは英語の試験であって一般教養の試験ではない、ということです。

今回出題した問題のキーワードである modern についてもそうです。「京大の入試問題だからきっと莫大な背景知識がないと解けないに違いない」と思いこみ、おおよそ大学生でも知らないような術語を頭に詰め込むことが、真に貴方を京大合格へと導いてくれるのかと問われれば、私は迷わず「No」と答えるでしょう。事実、この語の意味を判断するために必要なのは、「近代」と「現代」の相違についての基本的な理解と、時制についての基礎的な知識だけなのだから。

前置きはここまで。改めて問題を見てゆきましょう。

強者の戦略

今回出題したのは次のような問題でした。

問 アンダーラインをほどこした箇所(1~3)を和訳せよ。

One of the most important ideas of modern man is his idea of the modern itself. ①Of course men have always lived in “modern” times, but perhaps they have never been as much impressed by the fact. The word “modern” has not always been a weighty word; ②but for us it is, and behind it lies a particular idea of history and of our relationship to it. We assume that we live in a world of ceaseless change, and that our problems are persistently novel, and precedent and the past are almost no guides. And so to be modern is not only to live now, but to live now in an unprecedented way. ③Men in the past also must obviously have had a feeling of the distinction between the lives of their generation and previous ones. Yet nowadays we surely feel the situation in a very different way, both because the speed of change has enormously accelerated, and because we depend on it and, in a sense, make use of it.

【お約束】

ここからは、1文ずつ内容を吟味しながら読み進めてゆきます。なお、以下に示してある 訳例? は、生徒がやりそうなミスを取って織り込んだものになっています。この 訳例? を修正してゆく形で話を進めてゆきます。

1文目

部分 関連性 関連性

One (of) the most important ideas (of) modern man is his idea (of) the modern itself.

S V C

訳例?
近代人の最も重要な考えのひとつは、近代そのものという近代人の考えである。

冒頭で述べた modern が早速登場していますが、この1文だけから「近代」と訳すか「現代」と訳すかを判断することはできません。なので、ひとまずは保留ということにしましょう。ここで考えるべきは、ofの訳出です。この文には3つのofがありますが1つ目のofと残り2つのofは性質を異にしています。1つ目のofは many of the students (生徒達の多く) や some of the boys (数名の少年) といった形で登場するofで、ofの前に来る語 (many や some) はofの後ろに来る語 (the students や the boys) の部

強者の戦略

分に相当します。基本形は、「[数量を表す表現] of the [複数名詞]」です。残る2つの of は、about や concerning に近い意味を持っていて、直訳するなら「～に関する」といった訳語を充てることができます。of を一律的に「～の」と訳すような愚挙は避けるべきです。

このことを踏まえて訳例を作り直すと、次のようになります。

訳例：近代／現代人に関する最も重要な考え方のひとつは、近代／現代人がもつ近代／現代そのものに関する考え方である。

先ほども述べましたが、この段階では modern の訳語が確定できませんので、一旦「近代／現代」としておきましょう。

2文目に移りましょう。こちらは下線部になっていますので、自分が用意した答案と照らし合わせてみて下さい。

2文目

(1) Of course /men have always lived in “modern” times, but perhaps they have never been

/前置詞句/ S V /副詞/ V /前置詞句/ /副詞/ S V

譲歩構造

as much impressed by the fact.

C /前置詞句/

訳例？

もちろん、人間は常に「近代の」時代に生きてきたが、恐らく彼らは決してこれらの事実によって同じくらい印象を受けてこなかった。

そろそろ modern の訳語に決着をつけましょう。そもそも近代と現代の間にある根本的な違いは、時制にあります。近代は過去であり、現代は現在である...ということは、現在完了形の文の中にある modern は「現代の」と訳さなければなりません。冒頭であれだけ物々しく書いていた割に全く大したことの無いオチのように見えますが、過度に複雑に考えて結局間違えるよりもずっと効率的だと思います。

この文にはあと2つのポイントがあります。1つは、of course ~ but の譲歩構造。もう1つは、as much impressed の訳出です。前者については、「of course 文1, but 文2」(確かに文1だが、文2)の基本形を押さえていれば特に問題ないでしょう。後者については、as が原級比較の一部であることに気付けたかどうかポイントです。例えば、次の文を見てみましょう。

ex. He is tall. And I am *as* tall. 「彼は背が高い。そして私は同じくらい背が高い。」

この文において、私は一体「誰／何と」同じくらい背が高いのかと問われれば、貴方は迷わず「彼と」と答えられるでしょう。つまり、この文は He is *as* tall *as* I am. と全く同じ意味になるのです。tall の

強者の戦略

前に来る as (副詞になります) は、前文に比較対象が明示されている場合は2つ目の as 以下がなくても原級比較の働きを担うことができます。

それでは、今回の文における比較対象は一体何でしょうか。1つは、主語の they、すなわち人間(men)でしょう。ですが、もう1つの比較対象は前文を探しても何処にもないように見えます。こういった場合、疑うべきは**自者比較**の可能性です。つまり、2つの異なる対象を比較しているのではなく、**1つの対象がもつ2つの属性を比較している**可能性です。この文の場合、men には in “modern” times という修飾表現が付随しています。つまり、現代に生きる人間と、それとは異なる時代に生きる人間 すなわち、過去の時代の人間 と比較している、と考えるのが自然でしょう(未来に生きる人間と比較している可能性は排除して構いません。未来の人間の方が現在の我々よりも上だとか下だとか判断する客観的証拠を示すことなんて不可能なのですから)。

以上を踏まえた上で訳出を工夫すると、次のようになります。

訳例 : もちろん、人間はいつだっていわゆる「現代の」時代に生きてきた。しかし、その事実を今日ほど強く認識することはなかったのである。

3文目に移りましょう。後半部分が下線部(2)になっていますが、当然前半部分との論理的関係に注意しなければなりません。

3文目

部分否定

The word “modern” has not-always been a weighty word, (2) but for us / it is, and behind it / lies a particular idea (of history) and (of our relationship to it.)

S V C (2) S V / V

S

対比

訳例？

「現代」という言葉は常に重い言葉だったわけではない。しかし、我々にとって、その言葉は、その背後に歴史や我々の歴史との関係に関する特定の考えがあり、それが横たわっているのだ。

SV 構造と 訳例？ を見比べれば、何がおかしいかは一目瞭然だと思います。先に結論を述べておくと、訳例？ は it is の解釈に失敗していて、更には is と lies が and で結ばれた並列関係だと勘違いしています。

もう少し細かく見てゆきましょう。it is は、正しくは前文に指示対象をもつ代名詞 + 代動詞です。it は The word “modern”を、is は been とその後続く a weighty word を指しています。つまり、but for us it is は元々 but for us the word “modern” is a weighty word (だが我々にとって、「現代」という言葉は重い言葉なのだ) だったのです。

この解釈に辿り着くための契機となるのは、逆接の but の存在です。but は、前後の文に対比が成立する

強者の戦略

ことを表します。ですが、訳例？はその対比が...明確ではないですが、何となく成立しているように見えなくもない。試験本番の極限状態なら、或いは思考停止して「きっと試験官は私の意図を汲み取ってくれるさ」と割り切ってしまう人もいるかもしれません。ですが、断言しますが、試験官は貴方の意図を汲み取る気なんてこれっぽっちも持ち合わせていないでしょう。何故なら、英語における逆接構造は原則的に明確な対比しか許さないのですから。何となく対比っぽい、といった日本人的曖昧さが介在する余地など存在しないのです。つまり、「何となく文脈は合っている」は端的に「間違っている」ということなのです。独学を貫いていると、この「何となく合っている」を肯定的に捉えがちになりますが(かつての私自身もそうでした)、添削指導を通じてこの悪癖は是非払拭して下さい。ましてや、上に提示したような「常に重きが置かれていたわけではない」vs「重きが置かれている」の明確な対比を読み込む解釈が存在する以上、訳例？が得点に結びつく可能性は限りなく低いと言うべきでしょう。

もう1つの致命傷である lies に関する部分ですが、そもそもこれは a particular idea を主語とする VS の倒置型第1文型です。この程度の構造把握は普段なら難なくこなせるでしょうが、先の it is の解釈を間違えた瞬間、混乱が生じてしまうのです。

以上を踏まえた上で、訳を再構築してみましょう。

訳例 : 「現代」という言葉には、常に重みがあったわけではなかった。しかし、我々にとってその語は重みをもった言葉である。そしてこの言葉の背後には、歴史についてのある考え方と、歴史に対する我々の関係についてのある考え方がある。

その他の工夫としては、原文では前半が現在完了形で後半が現在形で書かれていましたが、訳出では敢えて前半を過去、後半を現在として訳出しています。2文目からも読み取れるように、過去と現在の対比軸が本文全体を貫いているからです。

4・5文目は下線部がありませんのでまとめて行きましょう。

4・5文目

We assume [that we live in a world of ceaseless change] and [that our problems are persistently novel].

S V (S) (V) O (S) (V) (C)

of+抽象名詞
形容詞化

and precedent and the past are almost no guides. And so [to be modern] is [not only] [to live now] [but]

(S) (V) (C) (V) (C) S V (V) C

[to live now in an unprecedented way.]

(V)

訳例？

not only A but (also) B
の構造

我々は、自分たちが無数の変化の中の世界に生きていて、我々の問題はずっと新しく、慣例的で、過去は殆ど何の導きにもならない、と思ひこんでいる。そしてそれ故に現代的であるということは単に今を生きるということだけでなく、前例のないやり方の中で今を生きるということなのである。

強者の戦略

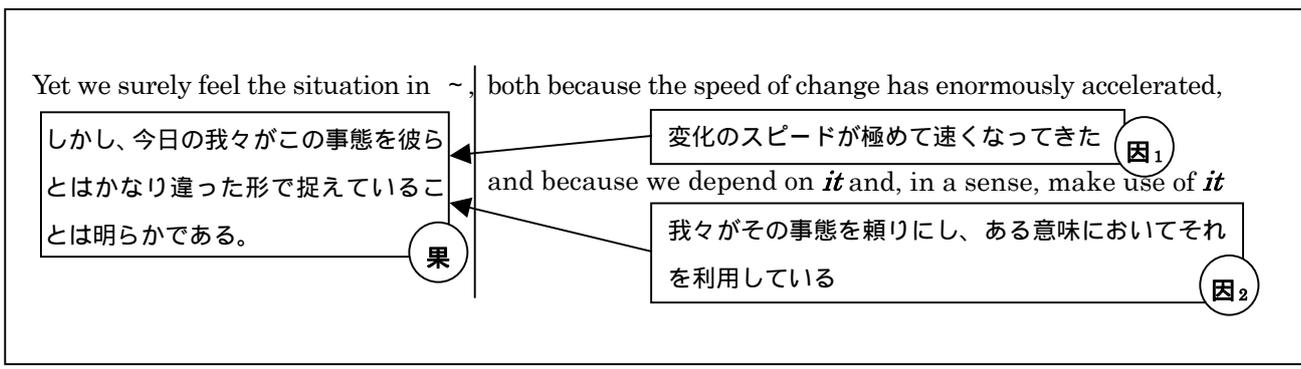
メージとは、ちまたに出回っているようなイラスト的なものではなく、native speaker たちによる英語による説明 要するに、英英辞典による説明です。Oxford Advanced Learner's Dictionary の feel の項目を見ると、「to notice or be aware of sth because it is touching you or having a physical effect on you」（sth は目的語）と説明されています。notice のニュアンスを踏まえると、feel the situation を「その事態を把握している」といった訳をしても問題はないでしょう。

それでは、訳例です。

訳例 : もっとも、過去の人間もまた、自分たちの世代とそれ以前の世代の生き方の間に相違があることを感じていたに違いない。しかし、今日の我々がこの事態を彼らとはかなり違った形で捉えていることは明らかである。何故なら、1 つには変化のスピードが極めて速くなってきたからであり、そしてもう1 つには、我々がこの事態を頼りにし、ある意味においてそれを利用しているからである。

もう1 つ工夫したいのは、冒頭に英文には対応するものがない「もっとも、」を追加したことです。理由は、5 文目までの内容を踏まえて6・7 文目を読み解くと、そこに譲歩構造を見出すことができるからです。3 文目で、筆者は現代を生きる我々はそれ以前よりも「現代」という言葉に重きを置いていて、その背景にある考え方が4・5 文目で提示されていました。それに対し、6 文目は Men in the past *also* ~ となっていて、過去の人間も現代の我々と同じように考えていたのだ、と切り返しています。そして7 文目に、改めて過去の人間と現代の我々との相違が提示されている。これは、譲歩構造のもつ典型的パターンです。なので、訳例 はこの譲歩構造が読み取れていることをアピールする訳し方にしてあります。

それと、もう1 点。7 文目の最後もある2 つの *it* を、ここでは直近の名詞 the speed of change ではなく the situation を指示対象にしています。和訳してみると、実はどちらを指示対象にしても文意は通るのですが、*it* が the speed of change を指していると解釈すると、主節との間の因果関係が不明瞭になるからです。



it を the situation を指すと解釈した場合、その含意するところは次のようになります。過去の人間は、自分たちはそれ以前の人たちとは違うのだと考えていたが、その違いについて強く意識する必要はなかった（端的に言えば、それ以前の人たちを無視していた）。しかし、現代の我々はむしろ過去の人間との違いを強調している。前回の導入時にポストモダンという言葉を引き合いに出しましたが、この概念自体が

強者の戦略

まさにこのことを象徴的に表していると思います。「我々は先人たちによって築き上げられた modern を超克するのだ」という気概が、「post-」(～以後)という接頭辞に表れているのでしょう。

最後に、全体の訳を改めて提示します。

訳例 :現代人に関する最も重要な考え方のひとつは、現代人がもつ現代そのものに関する考え方である。もちろん、人間はいつだっていわゆる「現代の」時代に生きてきた。しかし、その事実を今日ほど強く認識することはなかったのである。「現代」という言葉には、常に重みがあったわけではなかった。しかし、我々にとってその語は重みをもった言葉である。そしてこの言葉の背後には、歴史についてのある考え方と、歴史に対する我々の関係についてのある考え方がある。すなわち、我々は絶え間なく変化する世界に生きていて、我々が抱えている問題は常に新奇なもので、先例や過去の事実は殆ど何の役にも立たない、そのように我々は思いこんでしまっているのだ。そしてそれ故に、現代的であるということは、単に今を生きるということだけでなく、先例のない生き方をするということなのだ。もっとも、過去の間人もまた、自分たちの世代とそれ以前の世代の生き方の間に相違があることを感じていたに違いない。しかし、今日の我々がこの事態を彼らとはかなり違った形で捉えていることは明らかである。何故なら、1つには変化のスピードが極めて速くなってきたからであり、そしてもう1つには、我々がその事態を頼りにし、ある意味においてそれを利用しているからである。

最難関大学を突破するためには文脈把握が必要であり、そのためには莫大な背景知識が必要だ、とまことしやかに言われています。ですが、私はこの考え方を良しとしないことは、既にお分かりいただけたと思います。

私が考える文脈把握とは、作者がそっと忍ばせた論理展開を把握し、それを明示することであり、そのために必要なのは、普段から目の前の文章や事象(日本語・英語を問わず)について、他者の説明をそのまま鵜呑みにするのではなく、自分自身の力で思考し、咀嚼することだと思います。そのような意味での思考力は、努力を怠ってきた人が一朝一夕で身につけられるものではありませんし、その力を持つ者こそが真の強者と呼ばれるにふさわしいのだ、と私は思います。

これで2012年度の私からの出題はお終いです。またいつか教室で、或いはウェブでお会いしましょう。